明日への力

おおいた発 再生エネ

年間企画　第4章 先駆者たち③　千葉県市原市

太陽の光「分け合う」

農業と発電で安定収入

千葉県市原市に風変わりな農地がある。ハクサイやキャベツが育つ畑の3㍍ほど上にフジ棚のような架台があり、短冊状の太陽電池パネルが並ぶ。日光はその間から作物に降り注ぐ。

「太陽の光を農業と発電で分け合うソーラーシェアリングです」。五月晴れの下、水やりに精を出す高沢幸央（ゆきお）さん(78)、紀子さん(73)夫婦がほほ笑んだ。

幸央さんは農業歴60年。若い時は近くの工業地帯で働きながら、父親から受け継いだ1㌶余りの田畑でコメや落花生、サツマイモなどを作り続けてきた。

「せがれに農地を引き継げるなら、こういうやり方もあるかな」と話す。

↕　↕　↕

設備は長男の真（まこと）さん(51)が設置した。東京で小さな商社の役員を務めているが、いずれ実家を継ぐと決めている。その時を見据えて「農業が経済的に見合わない中、どうすれば農地を維持していけるか」と考えた。

太陽電池パネルの間から降り注ぐ日光で野菜を育てる高沢さん夫婦＝5月上旬、千葉県市原市

幸央さんを誘って、ソーラーシェアリングの実験施設を見学。「これだ」と見よう見まねで設計した。支柱の強度確保など地元の業者にも協力をあおぎ、約1300万円で完成させた。

7・5㌶の畑に設置した小型パネルは約350枚で出力は約35㌔。昨春から全量を売電し、1年間で約170万円の収入を得た。

一方、そこでできた作物を直売所で売った農業収入は約20万円。「日陰ができて育ちが悪くなるかと心配したが、特に影響はなかった。まだ1年なので何とも言えないが…」と幸央さん。「こんなに収入があるなんて」と驚いている。

↕　↕　↕

植物は一定量の光があれば育つ原理を利用したのがソーラーシェアリング。農林水産省は昨年4月、ガイドラインを示し、農業の新たな形として公に認めた。設置数（昨年末）は全国で48件とまだ少なく、大分県にはない。

大消費地にある市原市でも農業を取り巻く環境は厳しく、年を追うごとに耕作放棄地が増えている。

「安定収入が見込めるソーラーシェアリングなら若い世代の帰農や就農を喚起でき、再生に役立つのではないか」。真さんはそんな可能性を感じている。